第 109 回公開シンポジウム

保育の質とは何か ～事例を通して考える～

◆プレゼンター　大倉得史
京都大学大学院人間・環境学研究科准教授／発達心理学・保育学・法心理学

◆パネリスト　赤西雅之
社会福祉法人子どもの家福祉会理事長／幼児教育学

◆司会　一色伸夫
甲南女子大学総合子ども学科教授／子どもメディア学

一色：第 109 回「子ども学」講演会を始めます。今回のテーマは「保育の質とは何か～事例を通して考える～」です。近年、保育の量的拡大の裏面で、保育の質を度外視して保育の低コスト化を進めようとする自治体や事業者が増えており、そうした動向が一部の保育現場を危機的状況に追いやっています。今回の講義では、守られなければならない保育の質とは何なのかを考えていきたいと思います。

今日のプレゼンターの大倉得史先生は京都大学大学院人間・環境学研究科准教授で、ご専門は発達心理学・保育学・法心理学です。京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程を修了され、九州国際大学法学部講師、准教授を経て現在の京都大学大学院でご指導されています。主な単著は『育てる者への発達心理学』『大学における発達障碍者支援を考える』『「語り合い」のアイデンティティ心理学』などで、多くの本を書かれています。

もう御一方は赤西雅之先生です。学生の皆さんは「明日への子ども」などでお会いしたことがあるかと思いますが、今日はパネリストとしておいでいただきました。社会福祉法人子どもの家福祉会理事長で、ご専門は幼児教育学です。2006 年～ 2013 年、甲南女子大学人間科学部総合子ども学科教授でした。全国各地で新しい保育理念と方法をいろいろな角度から指導されています。子どもの家福祉会が運営する認定保育園、認可保育園は 12 カ所あります。主な著書に『モンテッソーリ入門』『自由な子どもの発見』『子どもの自由世界』『生まれかわる保育』などがあります。

では、まず大倉先生、どうぞよろしくお願いいたします。

大倉：皆さん、こんにちは。甲南女子大学には初めて来たのですが、高台で海まで見渡せる、非常にきれいな大学ですね。一色先生とお昼ご飯をご一緒しているところに、赤西先生がさっそうと現れて、このおしゃれな格好でサングラスでいらっしゃったので、僕の保育施設の理事長のイメージはほんわかされてる感じだったのが、赤西先生はターミネーターかハンターのようで、後

Copyright (c) 2017,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

ほど二人でディスカッションもしないといけないので、ちょっとおそろしいななんて思っているんですが(笑)。

さて、今から「保育の質とは何か」というテーマでお話します。皆さんは幼稚園教諭や保育士さんを目指しておられる方がほとんどだと思いますが、その目的意識にもしかしたら水を差してしまうような話になってしまうかもしれません。けれども、現実問題として日本の一部でこうしたことが起こっているんだと、とても大事な問題ですので知っておいてほしいと思います。

まず、「保育崩壊」を引き起こす構造についてです。「保育崩壊」という言葉を使いましたが、これは小林美紀さんの著書『ルポ保育崩壊』からの引用です。ちょっと読んでみます。

「もう！　なんで、泣くのよ！」

四月の保育所―。

本来なら笑顔で子どもたちを迎えるはずの若い保育士が、ひきつった顔でヒステリックに声をあげている。殺気立った雰囲気を感じとるようにして、子どもたちは、ぎゃあぎゃあと、よけいに泣いてしまう。株式会社がチェーン展開する、開園したばかりの保育所の一歳児クラスに実際に入って見ると、まるで地獄絵図のような光景が広がっていた。

（中略）

保育士は、皆若い。一番下は新卒、クラス担任の責任者でも二年目だった。園児たちがあまりに泣き止まないため、保育士が一人で三人をおんぶに抱っこしている。新卒の保育士が、「どうしていいか分からない」と口にしながら途方に暮れていた。リーダー保育士は怖い顔をして「泣き過ぎ！」と子どもたちに向かって叫んでいる。

（中略）

昼食の時間、まだ何人かの子どもたちが泣いている。泣き止んだ子どもがまずテーブルにつかせられ、食事が運ばれるのを待っていた。男の子がおしぼりを手にし、椅子に座ったがぶらんとテーブルに足を乗せてしまった。その瞬間に、力の強そうな男性保育士が「行儀が悪い！」と怒鳴りつけ、鬼の形相で、その子の手からおしぼりを奪い取り、テーブルにバシンとたたきつけた。そして、次の瞬間、その子の足を怒りに任せて強くたたいた。まだ物事のよしあしも分からない一歳の子どもを、だ。

（小林美紀『ルポ保育崩壊』pp.3-6 より抜粋）

これは虐待で問題になった保育所の事例ではないんですね。都市部にある普通の認可保育所の事例です。びっくりするかもしれませんが、こうした保育所が実は急速に増えているんです。その背景、裏側にあるのは、近年、日本で急速に進んでいる保育の規制緩和、保育にもともとかけられている定員だとかの規制を緩やかにしようと、つまり、そうすることによってより多くの子どもを入れよう、あるいは低コスト化、保育にできるだけお金をかけないようにしよう、そうした国の施策があるわけです。

Copyright (c) 2017,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

児童福祉法第24条1項、これは今でも生きている規定ですが、「保育を必要とする子どもについては市町村が保育をする」となっています。これによると、保育とは本来、行政がちゃんと責任を持ってやらなきゃいけないことなんですね、保育を必要とする子どもがいたら行政がちゃんと責任を持って面倒をみないといけない。だから、待機児童というのは法律違反になるんですね。待機児童が出ているということ自体が、その市町村が保育を必要とする子どもの保育ができていないということです。こういった規定を自治体の保育実施義務と言います。ところが近年、行政が本来持っているはずの保育実施義務を後退させるような施策が次々とうたれています。

まず、2000年、株式会社が保育園運営に入ってくることが認められました。さらに2004年、公営保育所、つまり地方自治体がつくって運営している保育所のことですね。これに対してもともと国が運営費を出していたんですが、これが一般財源化、つまり地方自治体が持っている自分たちのお財布から出して運営しなさい、たとえば京都市営保育所なら自分たちのお金で運営しなさいというかたちに制度が変わったんですね。こうなると、市町村側からすると公営保育所を運営するためにこれまで以上の負担がかかってくることになる。それでお金のかからない民間保育所に任せてしまった方が楽だという構造がうまれてきてしまったわけです。その結果、都市部を中心とした民営化、公営保育所をどんどん民間の保育所に譲り渡していこうとする民営化が嵐のように吹き荒れています。さらに2015年4月、子ども・子育て支援新制度が始まりました。非常に複雑な制度ですが、大きな狙いとしては認可保育所以外の保育施設、たとえば認定子ども園、小規模保育事業、家庭的保育事業、事業所内保育事業等々を増やしていく。さらに、そこにより多様な事業者の参入、今までは地方自治体と社会福祉法人だけで担ってきた保育を、株式会社も含めていろんな人たちに担ってもらおうということが狙われているわけです。

このことは一見良いことのように見えます。待機児童が問題になっていますから、多くの子どもたちを預けられる施設が増えれば、その解消にいいんではないかと思われるかもしれません。ですが、逆に見ると、これまでは一定の基準を満たした保育所を行政が整備する責任があったわけですが、この施策が行われると、形態の上でも質の上でもさまざまな保育が登場することになってきます。まあ早い話、行政にしてみれば保育になるべくお金をかけたくない、ただし待機児童は解消しなくてはいけない、保育施設は増やさないといけない、その時にできるだけコストをかけないでハコものを増やす方法がこの施策であったということです。

その結果、たとえば小規模保育事業等では保育士の資格が必ずしも必要ではないことになっています。そして、認可保育所を含め、企業の参入が進行しています。企業は社会福祉法人と違い、税制面での優遇がないわけですね。そうなると社会福祉法人よりもさらに厳しい人件費の抑制を求められます。つまり保育士さんの給料ですね。これをできる限り抑えることによって、何とか利益を上げるようにしなければならない。そうしないと企業としてやっていけない。たとえば横浜市のこんな調査があります。社会福祉法人の人件費、保育士さんの給料は保育園の総運営費70％ぐらいを占めている。一方、株式会社では53％ぐらいに抑えられていた。企業としては人件費を抑えないといけないので、何をするかというと、アルバイトの保育士を多用する、あるいは、

Copyright (c) 2017,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

とにかく若手や派遣の保育士さんを使いまわす。こうした人たちへの依存が進むんですね。企業も善意の企業と金儲け主義の企業といろいろあって、一概には言えないんですけれど、一般的な傾向としてこうした依存が起きてきている。その結果、一部で冒頭に見たような著しく質の低い保育が増えてきたのです。

では、そもそも保育の質とは何なんでしょうか。もしかしたら、この中には「きれいな建物、色とりどりの遊具がある保育所」、さらには「早いうちから英会話とか、小学校就学に備えて読み書きの練習をさせてくれる、あるいは体操などの専門の先生を呼んで来て体操をやらせる保育所」が質の高い保育所だと思っている人がいるかもしれません。でも私はそうしたことは保育の本質的なことではないと考えるのです。皆さんも小さな頃、そうだったかと思いますが、整然としてとてもきれいに整えられた建物よりは、雑然とした、『となりのトトロ』に出てくるような、自然の残る、木の味わいの残る建物、環境が好きだったのではないでしょうか。色とりどりの遊具は子どもたちの目を一瞬、引きますけれども、わっと駆け寄りますけれども、少しすると、あら不思議、砂遊び、泥遊び、木登り、水遊び、虫探しといった、いわば遊びの基本に戻っていきます。子どもは大人から出来合いのおもちゃを与えられるよりも、むしろ、大人からするとがらくたにしか見えないような、いろいろなものを自分たちで勝手に組み合わせて作って、どんどん遊びを創り出していく、そんな存在。ですから、子どもたちが本来持っている自発性・主体性・自由奔放さは、大人が用意するプログラムや出来合いのおもちゃが多過ぎると押しつぶされてしまうんですね。

きれいな遊具や習い事などの「派手」なものじゃないことはわかった、では、たとえば、身の回りのことを自分でできる力、あるいは協調性がとれる、集団行動ができる力、あるいは人の話をちゃんと聞く力、こうした生活に必要な力を身に付けさせてくれる保育園がいい保育園なんじゃないかという人がいるかもしれません。もちろん私は、こうした生活に必要な力をいらないというつもりはありませんが、ただ、そちらに傾く前にもっと大事なものがあると思っています。それは子どもたちの「心」です。「心」と言ってもいろんな側面があって、一概には言えませんが、とくに保育期にこの「心」は絶対養っておかなくてはいけないと考えるものが二つあります。

一つは、人間だれしもそうですが、私はこう思う、私はこうしたいという、私の思いをちゃんと持っている、こうしたいという思いをまず、どんどん形づくることですね。自分は何がしたいのかわからないではなくて、私はこうしたいんだ、こう思うんだという思いを形づくって、それをどんどん、どんどん押し出していく、そうした心。そして、これがしたいということに基づいて意欲的にそのことに取り組んでいく。その基盤、底には「自分はありのままの自分でいいんだ」という自信・自己肯定感がある。こうした心を「私は私」の心と呼びたいと思います。

もう一つは、私たちみんなそうだと思うんですが、他の人と心が繋がれると嬉しい、気持ちがわかり合えるとすごく嬉しい、ふわぁといい気持になれるなと、そうした心。さらには他者と繋がれると嬉しいから、自然と他者の気持ちを思いやろうとする、そうした心です。その基盤には、他者って自分にとって決して危険な存在じゃないな、悪い存在ではないなという他者への信頼感、

Copyright (c) 2017,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

また他者はきっと自分の気持ちをわかってくれるという信頼感だとか安心感がある。これを「私は私たち」の心と呼びます。

この両面を備えた心を、私は「主体としての心」と呼んでいますが、この「主体としての心」を保育期に育むこと、これが何より重要だと思っています。図にするとこんな形になります(図１)。

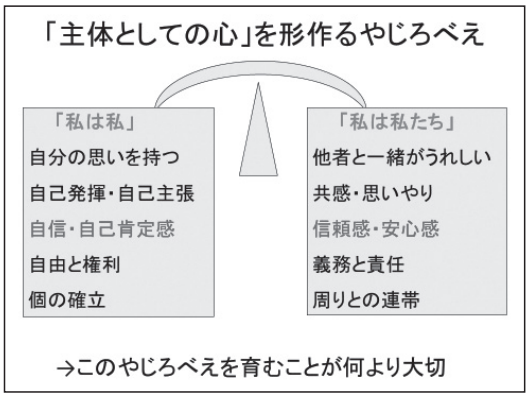

図1　「主体としての心」を形作るやじろべえ

もしかしたら、最近の若い方はやじろべえというおもちゃを知らないかもしれませんね。細い足で針先みたいな棒で立っていて、こうやって両腕でバランスを取って立つおもちゃです。「主体としての心」とは、このやじろべえだと思うんです。図の左側は、先程も言ったように「私は私」、自分の思いをしっかりと持ってはっきり主張していく、その根底には自信・自己肯定感があります。もう少し大きくなって青年期や皆さんくらいの成人期になってくると、自由と権利の主張や個の確立、私ってこういう人間よとか、アイデンティティの確立といった心に発展していきます。一方､図の右側の「私は私たち」､これは他の人と生活するってすごく嬉しいな､楽しいな､そうしたところから共感・思いやりが出てきて、その基盤には先程も言ったように他者への信頼感・安心感がある。これが発展して青年期になると社会の中で自分に与えられた役割をちゃんと果たしていこうという義務と責任の意識や、あるいは周りの人たちと連帯して社会生活を送っているという感覚に発展していきます。この自信・自己肯定感と、もう一方の信頼感・安心感という基盤ですね。これを保育期に養っておくことが何よりも大切だというのが私の考えです。

なぜ､“何よりも”なのか。保育期にいろんな力を身に付けさせる必要があると思っている人もいるかと思いますが、それ以前にまず、この心がないと、人間はいきいきとした生活ができなくなるからです。ちょっと考えてみたらわかるように､「私は私」という方向に傾き過ぎれば､つまり、自分がこう思う、こうしたいと主張することばかりになってしまえば、結局は周囲から孤立してしまう。その結果、自分でこうしたい、こうしてほしいという思いを持っていても、それが満たされなくなって、その人は最終的に孤立してしまい、なんだか物足りない感情にさいなまれてしまう。

また一方の「私は私たち」の方に傾けば、これはこれで苦しい。自分はこう思うという思いをひたすら押さえつけて、ひたすら周りに笑顔だけで接していく、自分の思いを我慢して他者の顔色ばかりうかがってひたすら合わせていく生活、これは非常に窮屈ですね。そういう生活ではかえって「私は私たち」という実感は得られなくなっていきます。

結局、やじろべえと一緒でどっちかに傾き過ぎるとパタンと倒れてしまう。人間はいきいきとした生活ができなくなってしまう。折れちゃうわけです。人がいきいきと元気よく生活していくためには、まさにやじろべえで、この両者のバランスがすごく大事なんです。私はこう思う、こ

Copyright (c) 2017,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

うしたいんだ、でもあの人のことを考えると…というように、「私は私」の心と「私は私たち」の心はしばしば葛藤しますね。葛藤しますけれど、そこに自分なりのおさまりを付ける。あるいは解決策を見出して、私たちは何とか生活していくしかない。それが唯一、私たちがいきいきと元気良く毎日を送っていく条件なわけです。

そういう意味で、子どもたちが将来、健康に幸せに生きていくための最も重要な基盤を、保育期に身に付けておくことがとても大切なんです。皆さんの中には教師を目指していらっしゃる方も多いと思うので、あまり大きな声では言えないんですが、今の学校教育は子どもたちの心を育てるようにはできていないですね。やはり学力をはじめとするいろんな力を身に付けさせようと、みんながんばっているけれども、学校教育期になるとこの「主体としての心」を子どもたちがぐんと伸ばす機会を、ある意味奪われてしまうわけです。だからこそ、保育期にあらゆる力の前に、こうした心を身に付けてもらうことが大切なんです。この心を欠いてしまうと、その人は将来的にどんなすごい力を身に付けたとしても幸せになれない。

皆さん、これから保育の仕事をされていく方もおられると思いますが、このことを一番の目標にしてほしい。両面の心をしっかりと備えて、そこに自分なりの折り合いを付けていけるような、バランス感覚を持った人間。もう少し簡単に言うと、「私は私」の心がぐっと伸びる、そして「私は私たち」の心がぐっと伸びる。やじろべえって手が短いと簡単に倒れちゃうんですね。ところが両腕がぐーっと長いと自然とバランスがとれるようになります。人間もそれと一緒で、主体の心も「私は私」と「私は私たち」の心がぐーっと伸びてくることによって自然とバランスが取れるようになってきます。そうした人間へと子どもたちを育てていくこと、これが保育期に何よりも大事なことなんじゃないかなと思っています。

では、この「主体としての心」をどうやって育んでいったらいいのか、保育士さんとしてどんなことを心がけたらいいのか。ごく簡単にお話していきます。それは二つあります。まず、一番重要なことは「受け止める」ことです。養護的働きと言います。子どもに限らず人間誰しもそうです。自分はありのままの自分でいいんだという自己肯定感を持てる唯一の条件、それは他者からあなたはありのままのあなたでいいよと認められる、受け止めてもらえるということです。いろいろとできないことはあるけれど、ただ存在しているだけで自分は自分でいいんだと、価値があるんだと思える唯一の条件がこれです。何かができたから自分は価値があるんだという条件付きの自信じゃなくて、あなたがそこに存在しているだけですばらしいよと受け止めてもらえる、その中で子どもに無条件の自信が育まれてくる。まず、これが大事。子どもも同じです。周囲の人、保育士さんから自分の思いがちゃんと受け止めてもらえた、その体験の積み重ねの中でこそ、先程言った、うん、自分はありのままの自分でいいんだという気持ちが高まって、ますます自分の思いを押し出してくるようになります。これが「私は私」の心に繋がっていきます。さらに、そうやってわかってくれる先生との体験を出発点として他の人との気持ちの交流を喜べるようになっていく。これが「私は私たち」につながっていきます。したがって、まず、どんな場合にも子どもの思いを受け止めていく、ここに心を砕くことをぜひ目指していただきたいなと思います。

Copyright (c) 2017,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

ただし、今、「受け止める」という言葉を使いましたが、誤解する人がいるんですね。子どものやることを何でもニコニコと大きな愛で笑って受け入れればいいんでしょと。そういったことを言っているのではないんですね。子どもは友達を叩いてしまったり、悪ふざけしたり、いろんな負の行動をしてしまいます。そうした負の行動も含めてすべてを「受け入れる」こととは違うんです。たとえば、悔しくて友達を叩いちゃった、その子なりに悔しい思いがあったということはちゃんと「受け止める」、これが悔しかったんだねと。あるいは高い所に登ってしまった、それだけ高い所からあっちが見たかったんだねと。それらの行動に至った思いはしっかりと受け止めていくことは必要なんですよ。でも、あなたがそんな高い所に登ってケガしたら先生は悲しいなと、してほしくないことをきちんと伝えていく必要があるわけです。保育士の願い、思いを伝え返していく、これを教育的働きと言いますけれども、「受け止める養護」に加えて「伝え返す教育」が備わってこそ、初めてきちんとした保育だと言えると思います。

たとえば、A君がBちゃんのおもちゃを横取りしちゃったという場面があったとする。しばしばやってしまいがちなのが、これはBちゃんが先に使っていたから返そうねと、保育士さんがそれを取り上げて渡しちゃう。これは大人の「こうすべき」を一方的に要求している、押し付けているだけで、自分のやったことを頭から否定されたA君の側に、自分はありのままでいいんだという自信だとか、Bちゃんに対する思いやりは育ちません。ここは、「A君、Bちゃんが楽しそうに遊んでいてA君もそのおもちゃがすごくほしくなっちゃったんだね」、と「受け止める」ことが肝要です。これをしてもらえると子どもは本当にふっと安心します。自分がおもちゃをほしいなと思ったこと、一緒に遊びたいなと思ったことは悪くないんだ、自分の気持ちをわかってもらえたと安心します。そして、その上で、「でもね、見てみて。このおもちゃはBちゃんが先に使っていたものだよね、ほら見て、Bちゃん、おもちゃを急に取られて悲しそうな顔してるよ」、などとBちゃんの気持ちに気付くように誘っていく、こちらの願いを伝え返していく。A君の方も、自分の気持ちを先生にしっかりわかってもらえたという気持ちのゆとりが出てきていますから、そこでBちゃんの気持ちにふっと思いをやることができるわけです。これをせずに、早く返しなさい、Bちゃんの気持ちに気付きなさいと言っても、A君はなかなかBちゃんの気持ちを考えられるようにはならない。

このように「受け止める養護」と「伝え返す教育」が一体となってバランス良く展開される。その中で「私は私」と「私は私たち」、この両方の心が自然にぐーっと伸びてきます。教育や保育というものを勘違いしていて、子どもをある方向にぐーっと引っ張りあげていかないといけないんだとやっておられる方もいらっしゃいますが、決してそういうことではない。子どもを保育する、育てるというのは、何かをさせたり教え込んだりして、大人の願う方向にぐーっと引っ張っていく営みではなくて、むしろ植物が適切な土壌を整えると自然に、植物の力で芽が出てくる、そういったかたち。子どもの思いを「受け止める」、また子どもも他の子どもの気持ちを「受け止める」、そうしたお互いが受け止め合える環境を整えることに心を砕いていると、子どもの主体性が自ら育ってくる、それを待つこと、それが保育士さんに求められることではないかと思ってい

Copyright (c) 2017,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

ます。したがって、冒頭に紹介した事例のように、もう泣き過ぎ！と怒鳴る、行儀が悪い！と叩くなどは、保育でもしつけでも教育でも何でもなくて、単に大人の怒りをぶつけ返しているだけの半分虐待みたいなものです。虐待の事例ではないと言いましたけれども、非常に論外であると言えます。こうしたことが保育の質に一番関わることではないかと思います。

ところが、この保育の質を脅かすような事例がいくつか出てきています。冒頭の事例もそうですけれども。まず、京都市の民営化の事例を紹介します。先程も申しましたように、国からお金が出なくなった、京都市は自分で保育所を運営しなければならなくなった。これは負担が大きいわけです。ですから京都市は他都市と同様に、2012 年に市営 5 カ所の民営化（民間移管）を決定しました。そして 2014 年にはさらに 6 カ所の民営化を発表しました。今やどんどん民営化が進められて、京都市の公営保育所率は全保育園の 1 割を切っています。これは福岡市と並んで非常に低い割合ですね。なぜ民営化を進めているのか、それは単純明快で、市営の方がコストがかかるからなんです。安い方がいいでしょうということなんです。実は公営と民営の差というのは人件費の差なんですね（図 2 参照）。

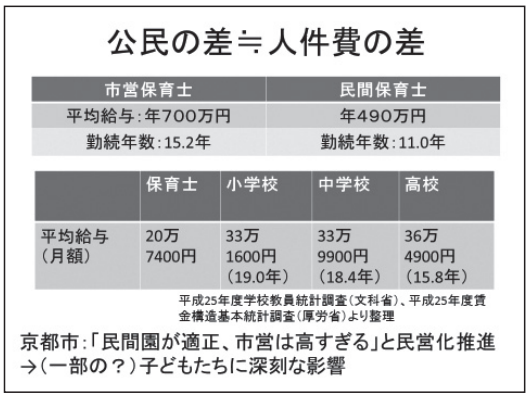

図2　保育士の給与

市営保育士さんの勤続年数は 15.2 年で平均給与は 700 万円です。一方、民間保育士さんは勤続年数　11.0 年で平均給与は 490 万円です。これだけを見ると市営の保育士さんがやたらベテラン揃いで高給を取り過ぎているように見えます。ところが、こちらの数字と比べるとどうなのか。これは全国平均です。平成 25 年度のデータでちょっと古いですが、これを見ると民間保育士さんの月額の平均給与は 21 万円弱ですね。じゃあ、小学校の先生はどうなのか、33 万円もらっている。中学校の先生 33 万円、高校の先生は 36 万 5 千円です。平均勤続年数で見ても小学校 19 年、中学校 18 年…。これを見ると、市営の保育士さんがとくに勤続年数が長くて高給取りということにはならないと思うんですね。では、この数字で何が見えるのか、同じ“人を育てる”という営みに携わっている仕事でありながら、保育士さんがいかに軽く見られているかということを物語っている数字だと思います。

ところが京都市は、むしろ民間の給与が適正ですよと、そういった論理なんです。で、市営は高すぎると、民営化をどんどん推進している。かなり強引な方法でやっているので、一部の子どもたちに深刻な影響が出てきたりするケースもあります。一つだけ紹介しておきます。A 君の事例です。A 君のお兄さんには重度のアレルギーがあったので、民間では受け入れてもらえず、市営保育所に流れ着いた。市営保育所は、民間で受入困難と言われてしまう重度のアレルギーを持つ子どもや障がいのある子ども、困難な家庭背景を持つ子どもが入所するケースも多いのです。

Copyright (c) 2017,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

で、お兄さんが入っていたのでＡ君も入所しました。この子たちのお母さんが本当に忙しく、最初は朝ご飯を作る余裕もなかったようです。そんなお母さんに、この市営保育所の担任の先生が、簡単な朝ご飯のレシピと「連携をとって一緒にがんばりましょう」という手紙を渡したそうです。お母さんの大変さを受け止めつつ、言葉を選んで保育士の思いを伝えたんですね。これは先程、保育士が子どもの思いを受け止めて伝え返すことが大事だと言いましたように、保護者に対しても同じです。それでお母さんの方でももう少しがんばってみようと思えたようです。「市営の保育士さんは兄のことも弟のことも、保護者のことまで本当に大事に考えてくれていた」と話しています。

ところが、この市営保育所が民営化されます。移管先の民間保育園は市営ののびのび保育とまったく違っていたんですね。子どもたちに自由がまったくない、朝はマラソン、次に体操、音楽、お絵かき、リトミック等々、１日中カリキュラムが組み込まれていたんです。朝送りに行くと､子どもたちにコップやタオルを準備させるなど作業が多い。動かない子どもがいると「○○君、どうするんだっけ～?」と保育士がぞんざいな声掛けをする。先程言ったように、子どもの気持ちに寄り添って誘いかけていくような、向き合っていくようなことをしていないので、子どもも反応しない。子どもたちが落ち着きなく走り回っている。こういう保育園ではとくに活発な子どもは目を付けられるようですね。おとなしくて保育士さんの言うことをよく聞く子どもとは保育士さんの対応が何だか違う。たとえば、お着替えの時間に走り回っている子どもがいたら、わっと捕まえて、保育士さんがその子の顎をつかみ「ズボンを履いたの、反省したの?」と詰め寄っている。そんなシーンもあったようです。この移管先保育園の本格的な運営開始から２カ月後、Ａ君は登園を渋り出します｡定刻に迎えに行っても「お母さん、なんでもっと早く迎えに来てくれなかったの」と怒る。ひと通り怒った後はぐたっとして食欲もない。さらに、それまではなかったことなのに､「お母さん、なんで僕の言っていることをわかってくれないの」と手が付けられないほどの癇癪を起こすようになった、情緒的にひどく混乱した様子を見せるようになった。言葉数も少なくなって、表現が幼くなってしまった。その頃にＡ君が描いた絵はたとえばこんなものです(図３)。

図３　移管先園在園当時の絵

元々はもっと形になったもの、たとえば人やロボットの姿などを描いていたそうなんですが。移管先の保育がＡ君の心にどんなふうに映っていたのか、この絵がはっきりと物語っていると思います。お母さんは先生に「子どもが園に行くのをとても嫌がっています。先生から見て気になることなどについてお話ししたい」と伝えます。しかし、先生からは「Ａ君にいろいろ聞いてみたら、暑いから…でした。Ａ君が『イヤ～』と言ったら『どうしてほしいか言って』と言ってみ

Copyright (c) 2017,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

てください」という簡単なアドバイスしかなかった。お母さんが話し合いたいと望んだことへの応えはなかった。で、お母さんは腹に据えかねて主任に経緯を話しました。すると主任は謝罪し、「これからはちゃんと書かせますから」と言った。でも、担任の先生はその後、連絡帳をまったく書かなくなってしまった。そしてお母さんに対して「あの人（主任）は保育に関わっていないんだから、私に直接言ってくれなきゃ困るじゃないですか」と言ったそうです。保育とは園が一つになってチームで行うものですよね。ちょっとびっくりする話ですね。さらに、送り迎えの時の保育士さんの無駄話も多く、お母さんは市営の保育士さんとのレベルの差を痛感して、他の幼稚園への転園を余儀なくされる。お母さんにとって幼稚園は土曜保育がないし、毎日弁当も作らなきゃいけないし、すごく大変だったんですが、移って良かったそうです。A君は初日から明らかな変化を見せたんですね。「幼稚園に行く」と言うようになった。帰りにも「今、これをしているからもうちょっと待ってて」と帰りたがらなくなった。癇癪も減っていって、怒っている理由もわかるようになった。また絵もこうした形のあるものに戻っていったそうです（図４）。

- 失敗すると消そうとするように（兄と対照的）
- プリント練習の「間違ったところは消しましょう」の影響？
- 「失敗したらいけないんだ」という感覚を根付かせる保育

図４　幼稚園転園後の絵

ただし、この絵の下の方でぐちゃぐちゃとなっています。お兄さんがちょっと失敗してもぐいぐい、のびのびと絵筆をのばしていくのと対照的で、A君は失敗するとぐちゃっと消そうとするそうです。お母さんが言うには、移管先の園でプリント練習をさせられていて、間違ったところは消しましょうと言われていたことの影響かもしれないと。もしそうだとしたら、「私はこうしたいんだ、こう思うんだ」という心を思いっきり伸ばしたい保育期に、「失敗したらいけないんだ」という感覚を根付かせてしまったのではないか。わずか２カ月の移管先の保育でしたが、非常に罪深い保育だったと言っていいんじゃないかと思います。

一体、なぜこんなことになってしまったのか、４番の項目「保育コストと保育の質」でお話しようと思っていたんですが、時間もあまりありませんので、ちょっとはしょります。ここで言おうと思っていたことは、海外ではすでに保育の質とは何か、あるいは保育の質とどんな要因が関係しているのか、かなり研究が進められているのです。皆さんのお手元の１枚ものの資料にあるように、保育の質について、たとえば、ヘルバーンとハウズは３つの質からなっていると言っています。１つはプロセスの質。子どもが園でする経験のことです。２つ目は条件の質。たとえば子ども１人に対して保育士さんを何人配置するのか、保育士さんにどれだけの学歴だとか経験を求めるのかなど。人的条件の質ですね。これも保育の質と密接に絡んでいると。さらに３つ目は労働環境の質。端的に言えば保育士さんの給与、退職率、ストレス度など、保育士さんが職場環境として感じていること。これも保育の質に密接に関係していると、欧米の研究は明らかにしてい

Copyright (c) 2017,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

るわけです。

ところが、公営の民営化は必然的に、より勤続年数の低い保育士さんにしようとか、保育士さんの総入れ替えをするなどということになってきますから、子どもたちはずっと同じ保育士さんに見守ってもらうことを、そこで切られてしまう。こうした事業者の変更は、欧米の研究の観点からいくと、保育の継続性、子どもたちをずっと見ていく視点の欠如だとか、保育士さんがより若くなる、より人件費の安い、給与の低い園に引き継いでいくという点で、質の低下に直結するわけです。それを行政自らが打ち出しているわけですから、これをやっといて、民営化しても保育の質は下がりません、事業者の変更をしても保育の質は下がりません、と言い切るのはちょっと無理があるんじゃないかというのが私の考えです。

さて、最後に民営化よりももっとひどい事例を紹介しておきます。ある院内保育所の事例です。病院内に主に看護師さん向けに設置されている院内保育所というのがあります。京都市立病院内の「青いとり保育園」もその一つで、1977 年に看護師さんたちが中心となって設立されたものです。この写真を見てわかるように、自然豊かないい環境でした。保育士さんたちの給与も、当時は認可保育園と同水準が保証されていて、夜間保育も行われ、看護師さんたちの非常に大きな支えになっていました。30 年以上にわたって運営されてきた保育園です。京都市立病院ですから、実質、京都市の負担によって、保育士さんの給与もちゃんと認可保育園並みにして、その結果、ベテランの先生も長く勤められていました。

ところがこの保育園が 2015 年、アート・チャイルド・ケア社という株式会社と業務委託契約を結びました。病院は約 9650 万円での委託を提示していたんですが、アート社が委託費として約 6650 万円を提示してきた。3 分の 2 ですね。保護者が「職員の継続雇用」を求めていたにもかかわらず、京都市と病院はその条件を外していました。そして 2015 年 1 月 26 日に突然、職員に対して 2 月 1 日に採用試験を行うことを通知しました。わずか 3 日後ですよね。そして面接でアート社から提示された給与は月額 13 万円、経験を問わずです。1 年目でも大ベテランでも同じ。今まで認可保育所と同水準でしたから年収 500 万、600 万円だった人たちに対してもです。それでも、子どもたちのことが気になりますから、保育士たちはここで働きたいと意思表示したんですが、結果は園長はじめほとんどの職員が不採用でした。数年の経験を持つ若手だけが採用された。でもその人たちも辞退して、結局 20 数名全員がいわば追い出されるような形で実質解雇されてしまったのです。不当解雇ということで今、裁判が行われています。

それで、問題は 4 月からの保育がどうなったのかということです。まずアート社の保育士さん、いろいろな年齢の方がいらっしゃったようですが、皆さん互いにほぼ初対面の状態。さらに引き継ぎも十分ではないので、園のどこに何があるのかわかっていない。子どもに名前を書いたテープを貼り付けて追いかける、保護者にものの場所を尋ねる、そんな状態。園の中では「そこ上がっちゃダメ!」「走っちゃダメ!」という焦りの声が響いていた。本来、保育士さんは「何をしちゃいけないか」より「何をすべきか」を伝えるべきですよね。ところが、たとえば、園を出るときに年下の子どもが靴をちゃんと履けないと、年長の子どもが「早く履かないと先生怒らはんで、キ

Copyright (c) 2017,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

レはんで」と言うようになった。明らかに年下の子どもにイラついている。あるいは先生に怒られるという不安感にさいなまれている。そんな状態になってしまったんですね。さらに、自然豊かだった園庭が非常にさっぱりとした殺風景な園庭に造りかえられました。砂場にも柵が造られました。で、砂地だったところにゴムチップが敷いてあります。夏のゴムチップは暑過ぎて外で遊べないんです。砂場も衛生的だからと特殊な焼き砂になっていますが、これだと子どもたちの大好きな泥団子が作れないんですね。虫もいない。外遊びが制限されてしまった。砂という素材を使い、想像力を働かせ、いろいろなものを作り出していく、子どもたちにとって大事な機会、あるいは砂の上に住むいろいろな生き物、命と触れ合う機会、屋外の開放感の中で身体を存分に動かして遊ぶ機会が奪われてしまったことになります。私の観点から言えば、子どもの育ちを促すような環境とはまったく言えないですね。きれいだからいいでしょうという、大人の思いだけで造った園庭だと思うわけです。

さらに、この園庭になって「園庭では靴を履きましょう」というルールができた。ところが以前はずっと裸足で走り回っていた子どもたちには窮屈なんですね。そしてある子どもが裸足で走り回っていて足の裏を深く切ってしまった。そのとき保育士さんが言った言葉は「だから靴を履けと言ったじゃない」だったそうです。そもそも、園庭で足を切るような危険な環境を放置していたという問題もさることながら、こういった一言一言に保育士の子ども観がはっきりと出ていると思うのです。子どもは大人の言うことを聞くべき、言いつけを守らない子は本当にしょうがない子だと。こうした眼差しのもとで､子どもに自己肯定感や信頼感は育つのか。育たないですね。

こういったように、保育の質は激変してしまったわけです。アート社の保育士さんはお給料が安過ぎる。給与 13 万円で税金など引かれたら下手したら一桁とかになってくる。また保育士さん同士も信頼関係で結ばれていない。保育士さんにとっても気の毒です。気持ちのゆとりや熱意が持てない。ここでがんばっていこう、ずっと働いていこうと熱意を持って子どもと関わっていくことは、この条件ではなかなかむずかしいと思います。そして、子どもたちの気持ちがうまくつかめなくなる、思うとおりに動いてくれない子どもに苛立ち､「それしちゃダメ」などと外的な圧力を用いてコントロールしていくような関わりが増えていく。だから、子どもたちが受けた保育環境の激変は想像以上です。その多大なストレスは、心身の不調が何人かの子どもから出ていることでも裏付けされます。子どもは保育の質が変わったからいやだとは言いません。しかし、たとえば 1 歳児の女の子は、半年前に収まっていたはずの夜泣きが再発し、保育園の食事も今までもりもり食べていたのに食べなくなった。園の中で十分相手をしてもらえないからでしょうか、お母さんが迎えに行くとその後はずっと抱っこ抱っこで離れないそうです。また 4 歳の女の子ですが、2 歳の頃トイレ・トレーニングもスムーズだったのに、アート社の保育が始まってから連日、おねしょをするようになりました。1 週間ほどで止まったのですが、今度は原因不明の腹痛を訴えるようになりました。そこでお母さんが受け止めて腹巻を巻いてさすってやると少し落ち着くようなのですが、でも、この腹痛は 1 年たった今年の 4 月でもまだ続いていました。さらに 5 歳児の女の子は円形脱毛症になってしまいました。これはテレビにも出ていた話ですが。この

Copyright (c) 2017,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

子のお母さんは「全身を動かして、のびのびと走り回る時間が少なく、何かため込んでいるのでは」と話しています。こうしたことが起こっているわけです。

保育の継続性ですね。事業者変更とはこの保育の継続性をぶちっと断ち切るようなものです。そして保育の質、また保育士の継続雇用を度外視してしまう、安けりゃいいという。コスト論だけで保育を進めていった先に何が起こるのか。こうした事例がはっきりと物語っていると思います。

ところが、こうした事実があるにも関わらず、行政やアート社は、「保育の質は下がっていません、健全に運営されています」の一点張りなのです。こうしたことではまずいですね。はっきり言って、子どもをちゃんと見ていないか、わかっていても表ざたにしないのか。行政や事業者の無責任体質と言っていいと思いますが、子どもの心の育ち、生活、生命を危険にさらしている現状が一部の保育現場で起きているのです。その背景には、安い方がいいやと思っちゃう市民がいるわけです。また、保育者側もこうした方が子どもたちにとっていいんだとはっきり言えない、そんな状況がある。ですから、市民、保育関係者、行政もみんなが保育の質とは何なのかということを正しく認識すること、そして、量的拡大は確かに大事ですが、ただ増やせばいいのではなく、質を下げない形での量的拡大を求めていくことが肝要なのではないかと、最近、私が強く感じているところです。

一色：大倉先生、どうもありがとうございました。いろんなことを教えていただきました。いずれにしろ、子どもたちの保育期が非常に重要だ、子どもの心についてきちんと学んでいかなければならない、また保育者がいかに軽く見られているか、そして保育の質について、これから日本で保育の質をいかに高めていけるのかということについてお話しいただきました。次に、これに対してパネリストの赤西先生からコメントをいただきます。よろしくお願いします。

赤西：皆さん、こんにちは。赤西と申します。保育の具体的なお話なども聞かせていただきました。具体的なお話しについては、私はコメントをする立場ではありませんので横に置かせていただきます。お話を伺って、心のありようを解説するってむずかしいなあと思います。私たちも保護者に対して、「お宅のお子さんはこんなことを言っていたからこうなんですよ」と解説することがありますが、解説すればするほど親は遠ざかるんですね。「それぐらいわかってます。でもこの子はできないから」と。君たちも先生に解説してもらって、なるほどと腑に落ちて定着すればいいですけど、なかなか届かないんですよね。おもしろいものですが。解説するって限界があるんです、でもわかってもらいたいことを伝えなければならない、コミュニケーションですからね。大事なポイントは言わねばならない、理解してもらわなければならない。ここのハードル、壁は大きいんだなと思いながら聴かせていただきました。たとえば、「伝え返す」教育。「受け止める」ことが大事なんだよと。また先生としてあるべき、望ましい姿。これも言われれば言われるほど、体が硬くなっていく。おもしろいですね。でも、教える側からすれば言わねばならない。むずかし

Copyright (c) 2017,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

いですね。

さて保育の質についてですが、まず建物の話から入られましたが、これは国が設置基準を作っていますので、職員の数や子どもの数、建物の平米数などは、とんでもないことはできないです、少なくとも認可されている園に関してはね。それと保育教諭の給与もずいぶん良くなりましたでしょう。皆さん、求人票をご覧になりましたか。ずいぶん良くなりましたよ。人事院の勧告の差額分もちゃんと3月に提供されるようですし、決して見劣りするものではなくなってきています。1クラス1人の先生に対して子どもは20名、イギリスでは7名で、これはええなあと思いますが、お父さんお母さんも先生1人の子どもの数について、少なければ「ええなあ、手厚く見てもらえるから」と、20名より15名と言えば喜ばれますよね。でもね、話はそう簡単ではない。皆さんは1クラス20名という設定の下に授業を受けますよね、テキストはそれが基準になってできていますよね。今の設置基準はそれが基になっています。皆さんはこの今の設置基準の枠組みからは逃げられない、全部に連動しています。だから、ただ単純に1人の先生に子どもが少なければ、という発想では通用しないのです。あらゆることを考えていかねばならない。今行われている状況をつぶさに学習して、私が先生になったときに、設置基準の中で私に何ができるのかと大学で教えられたことを基にして、まず考えてみることが大事です。ニュージーランドの友達の先生に聞くと、1人の先生に学生7名です。すごく手厚いですよね。この大学は何名ですかね。ゼミなどで。この授業のような100何名というマスの授業とは何なんでしょうね、と思いますよね。でも、これが文科省も厚労省も含めて決められていますから。設置基準というのはとても大事な情報なんですね。これは園を作るハードな部分ですので、大学でしっかりと勉強しておかれた方がいいと思います。

そして、大倉先生がいろいろ具体例をあげてくださったけれども、民間になるとなかなか劣悪な環境が増えてくるというお話。確かにその傾向はあるんですけれども、なぜかという理由はいくつかあります。たとえば、役所の皆さんは手を抜いているわけではないんですよ、どこの役所の皆さんも一生懸命やってくださっている、横着をして民営化しているところは一つもないです。ただ、この民営化を行う部署とは主に児童福祉施設を扱っていらっしゃるところが多いんですね。ということは、教育の部分は薄いと思ってください。教育委員会の人がそこに入ることは非常にまれなんですね。ですので、子どもを安全安心に預かるという発想が強いんですね。そこで、大倉先生がおっしゃっていたように、ちょっとずつ物足りないところが出てきてしまう。こういった背景を言うといろいろあります。とくに今は「こども園」でしょう。「こども園」とは学校と児童福祉施設の両方の機能を兼ね備えたものです。にもかかわらず、「こども園」づくりをされている自治体の人は児童福祉施設の専門家です。ということは、学校の部分は未知の部分なんですね。これからなんですね。しかし、ハード面に関してはいろいろありますけれども、保育の質はとりあえず担保してくださっているという現行の制度は、皆さん、よく理解された上で臨まれるのがいいかなと思います。

次に保育の質を考えるとソフト面ですよね。どんな仕事をするのか、先生方のことですよね。

Copyright (c) 2017,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

このときに問題になるのが、いつも言われることですが、「保育に答えはない」「良い保育とは何をもって言うのか」。これを言われると、どうしようもないですよね。「保育に答えはない」と言われたら、何を信じて何を目標にしていけばいいのか、それは一人ひとりがブラッシュアップして経験を積み重ねてなどと言われても、はぁとしんどくなりますよね。

結論を言っておきましょうね。「保育に答えはあります」。「保育に答えはない」とおっしゃる先生、研究者の方はいつも教える側から見ていらっしゃる。だから、答えが見つからない。皆さん、実習に行きましたよね。部分実習に行って子どもに絵本を読みます、歌を教えます。むずかしかったでしょう、学校で教わったとおりにやったでしょう。子どもに絵本を向けて、読み聞かせる早さも考えて、学校で教わったとおりにやったけど、子どもは聞いてくれへん。気が付いたら子どもは誰もおらへん。学校で教わったとおりにやったにもかかわらず、実際、部分実習は苦しかったですよね。また責任実習、紙コップでけん玉を作りましょうと。グループで集まってフルーツバスケットをしましょうと。いろいろやりましたね。カリキュラムを作ったでしょう。保育士の配慮などと作ったでしょう。なのにうまくいかない、時間どおりに終わらない。言うこと聞かんやつがおる。大変な思いをして終わりましたね。日本中でこのカリキュラム、マニュアルの本はたくさん出ています。日本中で先生や学生たちがそれを見て取り組んでいます。ところが、全部、結果が違います。これを見ると「保育に答えはない」ということになります。

立場を変えましょう。子どもからすると、「保育に答えはあるんです」。保育の答えは簡単ですよ。「子どもがしてほしいこと」です、ただそれだけです。それがわかるかどうかです。こんな例はどうでしょう。3歳児でお母さんに赤ちゃんが生まれて忙しく大変だ。上の子をかまってやれない。その子はだんだん機嫌が悪くなり、ぶすっとしてしまう。それでお母さんは気が付いて、赤ちゃんを早く寝かせて洗い物も片付けて、その子に抱っこしてあげるから、絵本読んであげるからと呼びかけます。彼女はぶすっとして「いらない」。「どうして？お母さん、今大丈夫だから」「いらない」。これが続くとお母さんは相談に来ます。「うちの子はなんで素直に甘えてこないんでしょう、ふてぶてしく素直じゃないんでしょう、どうしたらいいんでしょう」と。2年程前にテレビで予備校の先生が言った言葉が流行ったでしょう。「今でしょ」（笑）。あれはちょっと変な言葉ですよね。先生、教える人の言葉ですよね。もうわかりますよね、子どもが何を言いたいのか。ボキャブラリーがまだ乏しいから言えないけれど、心の中で思っているのは「今じゃない」ということですよね。「今でしょ」というのは大人の言葉ですね。子どもはぶすっとして「今じゃない」と怒っていますから。子どもの側から見ると、答えってちゃんと用意されているんですよ。ただ、むずかしいのは、たとえば「2歳児のクラスで積み木を投げたりして、ちゃんと遊ばないんです。教えても教えても乱暴に扱って。どうしたらいいんでしょう」、また「4歳児がケンカばっかりするんです。跳び蹴りのケンカするんです。どうしたらいいでしょう」ということもある。こうした場合、子どもが何をしてほしいのか、洞察してそれを答えにして保育教育をする。子どもをどう育てるのかという意味での子どもの声を聴く。2歳児が積み木を投げるというのは、もう飽和状態なんです。3つくらい積み上げると2歳児の手では4つ目がなかなか積み上げられない。壊

Copyright (c) 2017,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

れてしまうからいらいらっとする。5歳児はすごいですよ。7つくらい積み上げられる。ということは、2歳児は3段積むのはもうあきました、慣れました、あきました、次へ進みたいです、育ちたいです、教えてほしいです、もっと見たいです、聴きたいです、ステップアップしたいですと、じたばたしています。4歳児の跳び蹴りはどうでしょう。コミュニケーションですよ。人間関係ですよ。相手を理解することに苦しんでいるんですね。苦しんでいる子どもたちの育ちを見てとって、次の環境を準備する。5歳児を2歳児のところへ連れて行って「積み木遊びを見せてあげて」と。みんなはお兄ちゃんお姉ちゃんが上手に積み上げるのをじっと見てます。で5歳児が出ていくと、2歳児は今度は一生懸命模倣します。真似をして努力をする。もう積み木は投げない。

保育の質はさまざまにありますけれども、大学で教えていることもそうですが、一方的に大人が子どもにしてあげることばかりですね。子どもを理解した上で、子どもの声なき声を聴いて積み重ねて、それを保育の答えとして向き合っていくという訓練が圧倒的に足りないと思います。

この間10月に、1、2年目の新人職員40名ほどにアンケートをしたんです。「保育の仕事を始めてわかったこと」についてです。「子どもと全力で遊ばないといかんということ」「子どもがどうすれば長続きするのか、そんなことも考えないといけないので大変です」、また「お集まり、グループレッスンがむずかしい」、これはとても多かったですね。「どうすれば子どもを引き付けられるのか。すぐにネタ切れになります」「話し方に工夫が必要」「子どもが何に興味を持っているのか、いつも見ておかないといけない」「制作や作業のアイデアを考えるのが苦手なので困ります」「ピアノが苦手で困ります」「なかなか時間どおりに終わらないので、いつも残業になってしまう」「子ども一人ひとりの個性を把握するのがむずかしいです」「保護者との信頼関係をつくるのがむずかしい」「先輩の話を聴いて自分の意見を言うのがむずかしい」など、いろいろ出てきました。しかし、この中で一番多かったことが「子どもが好きなだけでは務まらない」ということでした。それでこのレポートを書いてくれた人たちを集めて研修をしました。そのときにこう話したんです。「子どもが好きなだけでは務まらない」という人がとても多かったけれど、じゃあ、「子どもと全力で遊ぶ体力があります。お集まりが大好きで、ピアノがめちゃくちゃうまい。作業のアイデアも抜群で、手仕事は得意です。子どもの個人差を把握するのもとても上手で、親との付き合いもうまくできます。先輩の話をちゃんと聴いてかわいがってもらえます」という人なら、「子どもが好きじゃない」人でも保育教諭が務まるわけですねと尋ねました。どう思いますか。子どもがきらいでもええやん、言わなきゃいいんだから、今話した仕事が全部ちゃんとできていればいい、完璧な先生なんだから。そう尋ねたら、みんな、うーんと考え込んで、それから2時間はそのことだけを話し合いました。皆さんはどう思いますか。多くの仕事は目に見えますよね、それらができると、保育の質は高いと思う。でも、子どもは好きじゃない。子どもが好きかきらいかは目に見えないから黙っとけばいい。さて、どうなんでしょうか。

保育の質は、今言ったようにハード面では設置基準があるのでとんでもないことはできない。まあ今、大倉先生が説明してくださったようなことは現実としてありますけれども、それほど多くはないかなと私は思っております。設置基準の枠の中できちっと向き合って、それを積み重ね

Copyright (c) 2017,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

て、多くの園はそういう意味では保育の質は担保されていると思います。理想はたくさんありますが。ソフト面で保育の質はと問うときに、「保育に答えはない」ということ。ここをもっと極めたいですね。「保育に答えはない」ほんまか⁉、私は「ある」と思っています。子どもに寄っていって、子どもをよく観察して、理解してということが、先生としていろんな接し方の違いが出てきますよね。そこに答えが用意されている。

では最後にもう一つ、これはどうでしょうか。あるお母さんに相談されたことです。皆さんもいずれはお母さんになって子育てをするでしょうが。そのお母さんは「人にあまり言えませんが、私は自分の子どもをあまりかわいいと思わないんです。これって母親として失格ですよね」ととても苦しそうでした。それでこのままではいけないと思い、ひょっとしたら２番目を産んだら子どもをかわいがれるかもしれないと、勇気を出して２番目を産みました。それしか思いつかなかったからと。それでも、やっぱり心底子どもをかわいいと思えない、母親として失格で、どこか欠落している人間なのかもしれないと泣きます。でも、そのお母さんは外ではとてもいいお母さんで通っています。子どもは清潔できちっとしつけもされていて、かわいがってもらっているように見える。園の先生たちからも理想的なお母さんだと評判がいい、子どももちゃんと育っている。でも、苦しい胸の内を抱えています。先程の「子どもはきらいや、でも仕事はちゃんとするで」という先生と重なります。一方では若い職員たちが「やっぱり子どもが好きじゃないとあかんでしょう」と言ってくる。「でも、そんなん目に見えへん、目に見える仕事をちゃんとせえよ」と、２時間、そればっかり話し合っていました。「やっぱり、子どもが好きっていうことが最初にないとだめやと思うんです」という言葉にみんな、共感して一生懸命反論しました。でも私は「そんなことない。仕事ができひんかったらあかんやろ。実習やボランティアちゃうで、仕事やで」と突き返す。「それでも…」と２時間続いたんです。皆さん、どうですか。あなたなら何が言えますか？

保育の質はなかなか答えがでない。むずかしいですね、とくにソフトの部分は。これから先生になろうとする皆さん、いろいろ考えてみてください。いろいろ考えて現場に出てほしいですね。

一色：ありがとうございました。赤西先生は現場の子どものことについて非常におわかりになっていらっしゃることがよくわかりました。それでは、お二人の先生方、お考えがそれぞれに少しずつ違っていらっしゃるところがあるので、その部分をお話しいただきます。大倉先生、赤西先生のお話についていかがでしたでしょうか。

大倉：一色先生がおっしゃったように、赤西先生は現場の方ならではのさまざまなエピソードを交えながらのお話でした。設置基準のことはもうええやないかということですので、やめておきますね(笑)。私が話した事例もそんなに多くはないんじゃないかということでしたので、多いんですけどね。もう少しだけ事例を話しますと、京都市で 2014 年に死亡事例が１件、頭がい骨骨折の事故が１件起こりました。この重大事故が認可保育園で起きました。その２園に特別監査が入って指摘されたのは、離職率が非常に高いことです。保育士さんが１年で半数入れ替わる。京都市

Copyright (c) 2017,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

はそういう指摘を受けながら、一方では保育士総入れ替えの施策を進めているという矛盾したことをやっているのです。認可外保育園の事故が取り上げられることが多いですけれども、僕の印象では認可保育園の一部でも起きているんですね。赤西先生の保育園では、保育士の資格取得のための奨学金を出されているとか、引越し費用の援助をされているとかね、保育士さんの働きやすい環境づくりに心を砕いておられることが、少しお話を伺っただけでもすぐにわかります。ところが、一方ではまったく対照的な園が実際に結構あるんだと。そして、もしかしたら皆さんが飛び込む園にもそうした可能性があるので、そのときにどうするのか、たとえばその園の改革に乗り出すのか、そういったことも可能性があるんだとお伝えしておきます。

さて、赤西先生のお話を伺って、とても感銘を受けたのが「保育には答えがあるんだ」ということです。僕など、研修会などをやると、つい「保育に正解はないんだ」とぽろっと言ってしまうことがありました。でも、赤西先生のお話を伺って、そういう見方もありだなと思いました。これから使わせていただこうかと思いますが(笑)。子どもがどうしてほしいのかということに対して実際に答えるかどうかは別として、「こうしてほしいんだね」とその気持ちを受け止めていく、理解していくことが、まず一つ、保育の動かせない答えなんだ、大前提なんだという部分について全面的に賛同いたします。ところが、その一方で正解はないとはどういうことかというと、子どもの本心を知っていくことがいかにむずかしいか、自分が子どもに寄り添っているつもりでもいかに寄り添えていないか、また子どものことをよく見ているつもりでもいかに全然見えていないか、そこでその人なりのいろんな工夫があるし、いろんな保育の仕方がある、そこにその人なりの、ある意味正解がない部分があるのではないかと感じました。

僕は大学の保育士養成課程で教えているわけではないので、正直言って保育士さんになるためのカリキュラムがどのように組まれているのかわからないんですけれども、赤西先生が言われたように、紙コップの制作はこうですよ、竹馬の制作はこうですよ、ということばかり教えられていて、子どもにいかに寄り添っていき、子どもの気持ちをいかに理解していくかという訓練がなされていないとしたら、そこはちょっと改めないといけないところではないか、国がカリキュラムを組み直すことや、皆さん自身も実習などでその部分にぜひ力を注いでいただけたらと、とくに実習は大きなチャンスですから、子どもの気持ちをわかるとはどういうことなのか、少しでも磨いてほしいと感じました。と言っても、僕も息子が小１で娘が３歳ですけれども、一緒に暮らしてても子どもの気持ちはよくわかりません。いつもちゃんとできているのに、なんで今日に限ってここでお着替えを嫌がるの、みたいなことはよくあります。先程言ったことと矛盾しているようですけど、「もうちょっと早くして」とつい言ってしまう。まあ、でも時々はわかります。わかるとやっぱり嬉しいですよね。気持ちをわかってもらえた子どもとは話が通じますから、そうなると子どもはちゃんとお着替えするよとなります。そこに保育者としての手応えがあると思うんです。子どもはかわいいですし、分かり合えると本当に嬉しいですね。赤西先生が「子どもが好きじゃなくても、仕事ができればいいんじゃないの」という、いわば挑戦的な問いかけをされたんですが、保育士の先生ご自身が「子どもはかわいい」という気持ちがないと、やはり仕事はやっ

Copyright (c) 2017,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

ていけないのではないか、いくら仕事がバリバリできても、それは大人社会でうまくできているだけで、子どもに寄り添えていない可能性があるんじゃないかと感じました。

先程、僕が「主体としての心」を育てるために、まず「受け止めて伝え返す」とお話ししましたが、そのことに対して赤西先生から「体が硬くなってしまうんじゃないか」とのご意見がありました。確かにそのとおりです。僕自身も普段の生活の中でまず「受け止めて」とはちゃんとやっているわけじゃないと、ぽろっと言いましたけれど(笑)。今日は伝えきれなかったんですが、子どもの気持ちを「受け止めて伝え返す」には、その場その場に応じた、また保育士や親それぞれの個性に応じた関わり方があっていいんです。ただ、一番根底にあるのは、「子どもの思いを大事にする」こと。一人の人間ですから。大人が言うことを聞かせる、指導するべき対象ではなく、自分なりの思いを持った大人と対等な人間なのです。その人間の思いをしっかりと理解しようとすること。これは子どもに限らずあらゆる対人関係の基本だと思うんですが、そうしたスタンス、気持ちを持つこと、そしてそれを心がけていくこと。完全無欠に実行することはおそらく不可能だと思うんですが、ついつい怒っちゃうことがあってもいい、でもその後に子どもと気持ちが繋がれる瞬間を積極的につくるようにすればいい。「あのとき先生、ちょっと怒り過ぎちゃってごめんね。でもこうしてほしくなかったのよ」とか、フォローする時間をつくるようにする。そうしたかたちで柔軟に考えていっていただけたらと思います。

一色：ありがとうございます。今日の子ども学講演会はお一人は研究者、お一人は実践者ということで別の角度からお話しいただきました。この別の角度がもう少し縮まってくると、よりいいお話ができるんじゃないかと思っているんですが、残念ながら時間がなくなってきましたので、学生からコメントや質問はありませんか。

学生 A：大倉先生の「受け止めて伝え返す」というお話を聴いて、すごく納得するところ、学習してきたところと繋がるところとがあるんですが、実際にアルバイトなどで現場に行ってみて感じたのは、現場の先生が自分よりも下の、たとえばアルバイトに来た学生や新任の先生に対して「受け入れる」ことが少なく、常にここして、ああしてと言われるんです。私たち自身が子どもに対して「受け止めて伝え返す」ようにしたいと思っていても、上の先生に対して子どもたちが「受け止めて」もらえずびくっとする、私たちも「受け止めて」もらえずびくっとする。だから、私たちも年上の先生たちに対して「受け止めて伝え返す」ことをしてもらえるように言っていかないといけないのかなと思いました。

学生 B：大変興味深いお話を聴かせていただいてありがとうございます。私も実習のときに子どもの気持ちに寄り添うだとか、保育の正解を見つけるということに努力していて、迷うこともたくさんあってまだまだ未熟で 100％できていませんし、私なりの答えは見つかっていませんが、子どもの気持ちを汲み取って自分なりの答えを見つけられるように努力していかないといけない

Copyright (c) 2017,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

なと学びになりました。

一色：ありがとうございました。

＜第二部＞

一色：では、これから皆さんといろいろと話し合っていきたいと思います。

一般 A：大倉先生、赤西先生、どうもありがとうございました。僕の体験なのですが、福祉フェアに行って、ある老人ホームのブースで話を聞こうとしたらパンフレットを渡され、「これを読んでもらったらわかるから」と何のための説明会かと思いました。またある保育園では「うちは給料これくらいしか出されへんから、もっと高い給料がほしかったら公立に行って」と言われました。僕は子どもが好きで保育園の実習にも行ったことがあるんですが、ちょっと障がいを持っているのでなかなか就職できません。でも保育の勉強をしたくて、この子ども学講演会にも数年前から来ています。まあ、こんなことがあったということでコメントさせていただきました。

赤西：同じ仕事をするものとして申しわけありません、ごめんなさいとしか言いようがないんですが(笑)。

大倉：そうですね、その施設の風土が知れますね。新しい人に入ってもらって、その人の発想を活かすという姿勢がまったくないわけですしね。こういう言い方はどうかとも思いますが、そういう施設は就職しない方がいいタイプの施設ということになるでしょうね。

一般 B：先生方、ありがとうございました。私は子どもの自然体験を行う NPO を 15 年ほどやっていますし、4 人の子どもを持っていて、末の高校 3 年の娘が保育の仕事に進みたいと言っているので、この講演会にとても興味を持って聞きに来ました。「主体としての心」、「私は私」としての自己肯定感、「私は私たち」としての仲間としての信頼感、この二つのやじろべえを育むことが本当に大事で、「受け止めて伝え返す」という保育の質のことを教えていただいて、自分の子育てや幼児期の自然体験をしている NPO 活動と、保育に関わりたいという娘に対しても伝えていきたいと思いました。私は保育士の資格を持っていませんが、保育士が非常に専門性の高い仕事なんだと思っています。「受け止めて伝え返す」こと、自己肯定感や仲間との信頼感を育んでいくことは人間としていかに大切か、日々感じていますが、自分の子育てでも何年間もかかったんですね。ですから、保育士とは頭も心も身体も全部使って子どもと向き合っているのに、日本では保育の質ということが低く見られているんじゃないかと感じています。大倉先生はどのようにお考

Copyright (c) 2017,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

えでしょうか。

大倉：なんで低いんだというのは、私自身、痛切に思っているところです。一つは保育所がもともと厚生省管轄で教育と切り離されたかたちで作られてきたことがあります。もちろん社会的評価がそんなに高くない中でも、これまで懸命に保育に携わって来られた方が作り上げられてきて、今の保育園というかたちができてきたという歴史的な経緯があるわけですが。ただ、そこに国として、保育のことをあまり知らない力のある男性たちが、まあある意味「子どもをみとけばいいんでしょ」というような見方があったのかもしれません、まあいわゆる男性社会からの偏見というか見方が、今でもあるんですね。男性議員さんに伝えてもなかなかわかっていただけなかったり。そもそも日本の女性の就労率がOECD各国に比べても、まだまだ下から数えた方が早いほど低い状況ですよね。国が保育にかけている費用もGDP比などで見ても、他の国に比べて低いというのは、まだまだ男性中心社会なのかなという気がします。パワーのある男性たちに通じないんですよね、若い世代の方があまり投票に行かないですしね。どうしても高齢の方が投票に行かれる数が多いので、子育て世代の声がなかなか政治に反映されにくい構造もあるように感じています。

一般B：保育の質というのは、子どもを預かって見守るだけじゃなくて、親として子どもを育てるときにも一番大事なことじゃないかと思うんですね。現場で民営化が進んで、保育の質が下がってきていることを考えると、育休の充実ももっと言われてもいいんじゃないかとは思うんですが、教師とか公務員ぐらいしか3年の育休は認められなくて、民間の企業ではなかなか。それよりも人口が減少していることで、女性も働いて子育てもして…と言われているので、労働力として。このままでいくと、待機児童解消のために保育所が民営化されて、保育の質が下がっていくのは否めないんじゃないかと思います。学生さんも保育士になったときに、現場で非常に苦労されるんじゃないかと思うんですが。

大倉：民営化するとすべて質が下がるという話ではなかったんです。今日お話ししたような事例もある一方で、実力のある園が受けると今までより良くなったりすることもあるので、十把ひとからげに民営化が良くないと言っているわけではないんです。ただ、行政が民営に託すときによほどシビアな目を持って評価しないと、最終的に子どもに被害が出てくるということがある。けれど、今の社会構造として行政が保育の質に対して持っている認識は甘いし、認可保育園だから大丈夫でしょと、その構造自体がまずいんじゃないかと。一部の園はたまたまうまくいくけれど、一部の園では先程のようなことが起きてくる。そういったことが起きることが問題だというのが、今日の話の中心です。また、育休の問題については、まさに女性が家で育児をするものだという、昔からの根強い先入観とでもいうようなものがあって、今の日本の社会で男性の育休取得率が低いという問題と、こんなに待機児童が出ているという問題は、基本的に同根だと思っています。

Copyright (c) 2017,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

一色：ありがとうございます。赤西先生、日本の保育費が他の国に比べて低いという点についていかがでしょうか。

赤西：いやあ、もうそんなに低くないですけどね。給付費の水準は非常に高くなりましたし、1号認定児を置いていらっしゃるこども園の給付金は非常に大きいですから、潤沢に回って来てますよね。ただ､問題があるとすれば､それをどう使うかということが法人に任されてしまっている、まあ役所の監査はありますけれども、それを子どもの処遇に使うのかどう使うのか、処遇にしても親の目を引く立派な備品に使ってしまう、もしくは子どものことを考えてきちんとした保育教材に提供する、使い方は園によってさまざまです。今、何年もかかっているとおっしゃったけど、日本には保育の哲学がないんですよね。だから、これにはとっても時間がかかると思うんですけれど、保育者論というものを厚労省が何年か前にしましたが、どのテキストを見ても保育の哲学が感じられるようなものはない、本当にマニュアル的な教え込みの、今までの授業形態をなぞるような、みんなで考えましょうというようなのは届いていないですよね。過渡期ですので、いろんな園があるのはわかりますけれども、職員の処遇にしても、経験者の方が増えればもちろん給与負担は大きくなる、当然ですけれども、それも今はまかなえない範囲ではない。工夫をすれば。たとえば、私が園長なら園長の給与を削ればいい、そうすれば職員の処遇は上がりますから。ですから、一つのパイをどうやってみんなに使い分けていくのか、その園の、施設の、法人の考え方にまかされているというのが、ちょっとむずかしいところなんですね。そこに公立のようなしばりがない。そこをみんなが好き勝手にするので、民営化が悪者扱いになってくるんですけれども、これも認定こども園になって少しずつ少しずつは改善されてきた。それと、公立は私の目から見ると非常に大変になっていると思います。なぜかというと、今、大倉先生がおっしゃったように、2004 年に一般財源化されて、職員の処遇ががたっと落ちた。人件費を低くするわけにはいかない。そうすると建物や子どもへの処遇を削っていかないとならない。それで今、公立の先生たちはとっても大変ですよ。そこで、賛否両論はあるでしょうが、認定子ども園は一つの突破口かなと私は考えています。

一般 C：こども園で働いています。貴重なお話をありがとうございました。大倉先生のお話を聴いて、保育の質の低下ということで、最近、テレビや新聞で取り上げられていることだと、何が起こっているのか、よく整理されていてわかりやすかったなあと思いました。保育を求める子育て家庭の方がたくさんいるんですけれども、国がそれに応えようとして大きくすればするほど、保育の質の低下が現状としてなくはないのかなという思いと、自分も保育の現場に携わっているので、保育の質の低下が多く言われると悲しい気持ちにもなります。また赤西先生の言われた新人研修に私も行かせてもらったのですが、今日、伺った、そういう思いを持って、あの時お話しされていたんだなと思いました。今日の授業が始まる前に学生さんがわやわやっとなっていて、なかなか授業を始められなかったのを見ていて、この学生さんたちも保育士になっていくんだな

Copyright (c) 2017,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

と思いつつ、今は何でも便利な時代、いろんな見えるものを見て育ってきたこの人たちがどんなふうに先生となっていくのかなと。先日の研修会での「子どもが好きじゃない」こと、見えないことをあれこれ考えながらやっていくことが大事なことで、子どもを見る力に繋がるんだなと思いました。

大倉：先程お話したように、がんばっている保育園は本当にがんばっておられるので、十把ひとからげに保育の質が下がっていると言っているわけではないんです。ただ一部で、新制度で利用者給付制になって、事業者が自由にお金を使えるようになってきた中で、悪意のあるというかそれほど善意がないところがあるのは問題だなと思っています。その一方で国も少しずつ何とかしようとしていて、赤西先生のところもそうだと思いますが、何とかしていこうとがんばっておられる園があることも承知しています。そんな悲観されなくてもいいのではないかと思います(笑)。

赤西：確かに授業が始まる前、一色先生が注意されているのに聴いていない学生が多かったですよね、行儀が悪いですよね、いい大人なのに。それでも私たちは向き合うしかないですよね。賢い子ばかりあてがわれるわけではないし。どんな子どもでも、大倉先生はどんな学生でも、相手は選べない。どこでも仕事をするわけです。最初に言ったように、解説を聴くのはどうもしんどいみたい、説明されるともううんざりしてくる、じゃあ、私たちは子どもと向き合うときに、何を武器として、何をもって向き合うべきなのか、もっと工夫をしてブラッシュアップしなければならない。絶対第３の道があると思うんですね。それを子どもたちは持っている。清く正しく美しく、間違ったことは大学では教えませんので、学生たちはもうわかっていますとうんざりしてくる。清く正しく美しいことが多過ぎる世の中にどっぷり浸かっている。小学校で道徳が教科になりましたよね、ある先生が宿題を出した。くまさんが一番大切にしていた貝殻を友達がほしいと言った、すごく迷ったけれども友達がとても欲しがっていたからあげた、その友達はすごく喜んで帰った。で、このことをどう思うかが宿題となった。ある主任の娘が１年生ですが、「私は一番すきなものを人には絶対あげない」と言ったそうなんです。でも宿題にはくまさんはえらかったと書いてるんですけどね(笑)。先生の気に入る答えは、みんな知っているんです。本音はどうも違う。だから、若い人たちも小さな子どもたちもいろんな苦しい状況があって、その中で私たちは「それでもな…」と導いていかなければならない責務がありますよね。このことを私たちはもっと考えていかなければならないと思いましたね。

一般Ｄ：私もこども園で働いています。今日はありがとうございました。今、赤西先生がおっしゃったことに触発されて考えたのですが。大倉先生がおっしゃった「子どもをかわいい」と思うことが子どもをわかる道ということに共感したのと、赤西先生の「子どもを好き」と思うことのむずかしさにも考えさせられました。同じように「受け止めて伝え返す」こともむずかしいことだと思いました。たとえば、どうしても「かわいい」と思えない、「受け止められない」ことに正直であっ

Copyright (c) 2017,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

たり誠実であったりすることが、本当は子どもと向き合う上で大事なんではないかとも思いました。子どもの言うことを「わかる」ことが「受け止める」ことではないので。

大倉：そうですね、先程、学生さんが「受け入れる」と言っていたので、うーん、私の言いたいことがちょっとわかってもらえなかったかなと思ったりしたのですが。私が言いたかったのは、子どものやることなすことをすべて「わかるよ」「受け入れるよ」という話をしたんじゃないんですね。子どもがそうしたくなった、その気持ちはわかる。でも、そこで対峙するときにはちゃんと対峙する。それが本当の意味での「受け止める」だと思っているんですね。「先生はあなたがそんなことをしているのが、本当に悲しいんだ」とか「本当にそんなことはしてほしくないんだ」と真剣に伝えていくことが、本当の意味での教育的働き、「受け止める」働きと「伝え返す」働きが一体になって、ときには教育的働きがぐっと前に出ることもあるかもしれない。でも、根底にあるのは「あなたのことを一人の人間として尊敬する」「私がこれだけ言ったら、きっとわかってくれるよね」という信頼感だとか、「あなたも一人の人間としていろいろやりたいこともあるだろうし、自分なりにいろいろと葛藤することもあるだろう」などと、そんなスタンスで問いかけていったり、自分の気持ちを伝えていったり、そうしたことが今日、一番言いたかったことなんです。この話をすると、子どもをかわいいと思って、言うことをすべて受け入れればいいんですね、などと言われがちなんですが、そうじゃないよということも含めて「受け入れる」と「受け止める」を青と赤で明確に区別していたんです。したがって、おっしゃることは違っていないんじゃないかと思います。私だったら、「一人の人間としてあなたのやっていることはどうかと思う」という向き合い方になるかなと思います。

赤西：それでもね、正義は勝つ、いつも誰かを悪者にして。たとえば、こんな職員がいましてね、「赤西先生、私は子どもをかわいいと思ったことないです。子どもはおもしろいと思っているんです。」って言うんですね。背景によって言い方が違うので、どう理解したらいいのか、今まだ宿題で残ったままなんですけどね。「かわいいって思ったことないけど、子どもっておもしろいですよ」と言われたら、ちょっとドキドキするけど、どういうことかなと。いろんな切り口で評価しないといけないんだけれど、私はまだそれが持てていないなと、宿題なんですね。

学生 C：保育の質のお話を伺ってて、教育実習でのある場面を思い出しました。私は 4 年間学んできたけれど、まだちゃんと実践できないんですが、実習で材料も簡単でシンプルな紙とんぼを作ったんです。誰でも作れるような。子どもたちもこれならできるだろうし、その場も収まるだろうと思って。だけど、子どもの中には泣く子もいるし、私にどうしたらいいのかを伝えられない子もいるような状態になってしまったんです。それは信頼関係もあるだろうし、私は簡単だと思ったことでも子どもにとっては簡単じゃなかったということもあるだろうし。保育園や幼稚園となると 1 対 30 くらいになるし、保育の質は物的なことだけじゃなくて、簡単な活動でも子ども

Copyright (c) 2017,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

にわかってほしいなとか、楽しんでほしいなという愛情が大切なのかなと思いました。

赤西：それって精神論ではなくて、準備不足だったんじゃないのかな、いろんな想定が足りなかった。ごめんね（笑）。

大倉：子どもたちへの愛情があるからこそ、いろんな準備をしておくことが大前提となりますよね。それ抜きに単に仕事だからとりあえずいろんな準備をしていかなあかんなというスタンスになってしまうと、たぶん、おもしろい遊びを考えられないんと違うかなと思うんですよ。楽しんでほしいということは、自分自身もやってて楽しいことじゃないと。まあ、もしかしたら経験とか、子どもたちの様子がわからないとか、そういうこともあるかもしれないけどね。準備不足とは言ったけど、教育実習でそんな完璧に回りませんて（笑）。大学出て保育士さんになれたら、保育士さんとして完成されたかといったら、そんなことありませんから。10年とか長い時間をかけて保育ができるようになっていくでしょうから。ですから完璧にしようと思わなくてもいいと思いますが、おっしゃるように根底には子どもたちがどうしたら楽しんでくれるかなという愛情、まあ、愛情と言わなくてもいい、子どもたちと一緒に楽しみたいという気持ち、そうした気持ちがあるから、いろいろ工夫するし、ちょっと失敗したら今度はどんな工夫をしたらいいのか考えていけるし、そうしたことの積み重ねですよね。子どもとの毎日を繰り返しながら、何年も過ごしていくと、ああ、今日の遊びはすごくおもしろかったな、予想しなかった展開になっていったな、豊かだったな、体の芯に何かあたたかいものが残るなとかね。そんな経験が出てくると思います。

赤西：私もそう思いまーす（笑）。

一色：はい、じゃあ、これからもがんばってくださいね。

一般Ｅ：大倉先生のお話で保育崩壊であるとか、保育の現状について、現場にいる僕も知らないようなことがたくさんあって、勉強になりました。男性保育士として処遇の面もとても気になる点ではありますし。ただ、大倉先生もそのことが一番お話されたかったことではないとおっしゃっていましたが、学生さんたちがどう思ったのかなとちょっと気になりました。これから保育関係を目指す学生さんたちに、もちろんハードな面も知っておかないといけないとは思うんですが、子どもと接していて楽しいこととか、子どもっておもしろいなという部分がもっともっと伝わって、保育を目指す学生さんたちが増えていけばいいなと思いました。僕も久々の講義で大学時代を思い出し、ちょっとドキドキしながら聴きました。

一色：ありがとうございました。では今日はこれで終わりにしたいと思いますが、私は赤西先生がおっしゃった「日本には保育の哲学がない」ということについて、この後、じっくり話し合い

Copyright (c) 2017,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

たいと思います。

皆さん、ありがとうございました。

Copyright (c) 2017,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.